

11 アイヌ民族の人物紹介

遼星 北斗 いぼしほくと

(1902年～1929年)

1902(明治35)年1月1日、現余市町に生まれる。本名、滝次郎。1914(大正3)年尋常小学校を卒業。

1917(大正6)年から道内各地に出稼ぎ、病気治療を繰り返す。

1925(大正14)年2月、上京し、東京市場協会事務員に就職。同年3月、第2回東京アイヌ学会で講話。

1926(大正15)年11月、アイヌ民族復興の使命を痛感し、《ヤウンモシリ》(北海道)へ帰る。1927(昭和2)年、イギリス人宣教師バチェラー氏の創立した平取幼稚園(現平取町)を手伝う。日雇いをしつつアイヌ研究に従事。1928(昭和3)年、歌詩『志づく』(札幌・零詩社)に『遼星北斗歌集』が特集号となる。この頃、病気が再発し、1929(昭和4)年2月に死去。

1930(昭和5)年、遺稿が整理され、遺稿集『コタン』が出版される。1968(昭和43)年、平取町二風谷小学校校庭に、「遼星北斗の歌碑」が除幕される。

明治政府の行った同化政策は、アイヌの民族としての基盤を否定し、文化を壊滅させることであった。

言葉や文化を急速に失ったアイヌ民族は土地を奪われ、侮辱され、絶望の縁に追いやられた。その様子を憂いた北斗は、アイヌ民族の復興を願い行動した。

貝澤 正 かいざわただし

(1912年～1992年)

1912(大正元)年11月18日、現平取町二風谷に生まれる。

1927(昭和2)年3月、平取尋常高等小学校を卒業。1932(昭和7)年、三井山林で冬山造材人夫として働く。1941(昭和16)年、「開拓」団員として「満州」に渡る。1967(昭和42)年、平取町議会議員に初当選2期8年間務める。1972(昭和47)年、二風谷アイヌ文化資料館落成、初代館長となる。

1972(昭和47)年、北海道ウタリ協会副理事長に就任し、1974(昭和49)年、第1次アイヌ訪中団団長として中国訪問。以後、アラスカ、北欧、サハリン、

ソ連等を訪れ、先住民と交流。1987（昭和 62）年、二風谷アイヌ語教室が開設され、運営委員長を務める。1988（昭和 63）年、北海道ウタリ協会編『アイヌ史』編集委員長を務める。1991（平成 3）年、二風谷ダム建設のための国による土地の強制収用に反対し、建設省で意見陳述する。三井物産株式会社社長にアイヌ民族への山林の返還を訴える書状を送る。1992（平成 4）年、逝去（79 歳）、本人の遺言により葬儀はアイヌ式で行われた。

萱野 茂 かやのしげる

（1926 年～ 2006 年）

1926（大正 15）年 6 月 15 日、現平取町二風谷に生まれる。二風谷尋常小学校を卒業後、造林業に従事、その後、製炭業、樵（きこり）など山仕事に従事する。1959（昭和 34）年頃に木彫業を、1972（昭和 47）年頃からは天職となる文筆活動を始める。

1972（昭和 47）年からは二風谷アイヌ文化資料館副館長、1981（昭和 56）年から館長を務める。

1974（昭和 49）年 2 月、処女作『キツネのチャランケ』を著し、二作目の『ウエベケレ集大成』で「第 23 回菊池寛賞」を受賞、『ひとつぶのサッチポロ』に代表する昔話、『二風谷に生きて』などの随筆や『萱野茂のアイヌ語辞典』など多数の著書を刊行、1989（平成元）年に「第 23 回吉川英治賞」を受賞する。

1975（昭和 50）年に平取町議会議員に初当選し、以来 5 期 17 年余り平取町の教育・アイヌ文化の振興に尽力する。1994（平成 6）年にアイヌ民族初の国会議員（参議院議員）として国政に参画、国会の初質問ではアイヌ語でアイヌ民族の自然観を紹介するとともに《ヤウンモシリ》（北海道）の生態系維持を訴える。

任期中には、アイヌ新法の制定に大きく貢献するとともに、生涯をアイヌ民族の伝統文化継承とアイヌ民族の地位向上に努めた。

2006（平成 18）年 5 月逝去（81 歳）。

1893（明治26）年、川村イタキシロマ、アペナンカの長男として旭川市永山町に生まれる。カ子ト誕生の翌年、一家は近文に移住。祖父の川村モノクテは、旭川地方の《コタンコロクル》（首長）。

伝統的な生活を禁止されていく中で、職業に就く必要から、15歳で鉄道敷設予定地測量工夫に従事した。25歳のときに、鉄道院旭川建設事務所測量工手、後に建築工手に採用され、道内各線の敷設予定地の測量を行った。その後、朝鮮半島、《ヤンケモシリ》（樺太）、長野県などで測量を行う。昭和初期のこと、長野県と愛知県を結ぶ飯田線（当時は三信鉄道）は、その線内に天竜峡という険しい渓谷があったためになかなか開通できなかった。アイヌ民族の測量隊の話聞いた三信鉄道の依頼で、長野県で測量と敷設工事の現場監督も務め、苦難の末、1937（昭和12）年飯田線を見事開通した。

大正末期から昭和初期にかけて近文アイヌ民族の生活向上のために、民芸手工芸組合やアイヌみやげ品企業組合を設立した。

カ子トの本当の名前は《カネトウツカイヌ》（金を稼ぐ人）、その名の通り測量の仕事で財をなし、三階建ての洋館を建て、周囲を驚かした。

「人は金のために仕事をするのではない。人のために仕事をするのだ」と語り、私財を投じてアイヌ文化の正しい理解を求め、アイヌ記念館を設立した。

第二次世界大戦後はアイヌ文化伝承に力を入れ、79歳のときには、アメリカ、シカゴで開かれた「第9回国際人類学会議」に招かれ、自ら撮影した16ミリフィルム「アイヌ生活実態」を発表した。晩年は、アイヌ記念館で観光客にアイヌ文化を丁寧に解説した。生前を知る人によれば、たいへん優しい口調であったという。

1875（明治8）年、幌別コタン（現登別市）の《コタンコロクル》（首長）ハウエリレと、モナシノウクの長女として生まれる。アイヌ名はイメカヌ。

彼女は幼少の怪我で足が不自由となり、結婚をあきらめてキリスト教の伝道師として生涯を生きる決意をした。しかし、この不幸な出来事が、幸いにも後年ユカラの筆録に余生を捧げる運命に彼女を導いた。少女時代に、妹ナミとともに函館にあった聖公会のアイヌ伝道師養成の愛隣学校で教育を受けた後、日高管内平取コタンで12年間、旭川町（現旭川市）近文コタンにて約20年間伝道活動を行った。それは単なるキリスト教の伝道所ではなく、《コタン》（集落）の女性たちの集会所のような存在であった。《コタン》（集落）の女性たちに《ユカラ》の伝承や、文字を教えたり、新聞や雑誌の紹介など当時の《コタン》（集落）の人が知らない世界がそこにはあった。

近文では金田一京助が絶賛した《ユカラ》伝承者である母親のモナシノウクが、足の不自由な彼女の身の回りの世話をするため同居し、さらに姪の知里幸恵を進学のために引き取って養育した。また近文コタンの《ユカラ》の名手、川村ムイサシマッも度々彼女の伝道所にやって来ては、互いに《ユカラ》を語り合ったという。

布教活動を退いてからは、故郷の登別にて母から伝承した《ユカラ》などを愛隣学校で学んだローマ字で筆録し、金田一京助氏と甥の知里真志保氏に合わせて実に160冊にもものぼるノートを残した。その一部は、1958（昭和33）年、金成マツ筆録、金田一京助訳注『アイヌ叙事詩ユーカーラ集』として出版されている。彼女がこのような偉大な仕事を為し得たのは、姪で養女の幸恵が無念にも志半ばでこの世を去り、果たせなかった仕事の重大さに気付いたからであった。

1956（昭和31）年 紫綬褒章受章

1888(明治21)年、父、稲高トンビン、母イトモシマツの間に深川イチャンで生まれ、2歳のときに雨龍フシコ・コタンに移住、同地で育つ。幼い頃の暮らしはアイヌ伝統のものではあったが、和人の風習を受け入れなければならない現実との葛藤の時代であった。両親はアイヌ民族の暮らしが変わらざるを得ない状況下で、彼女の希望する「学校」へは通わせず、兄弟姉妹の中で一番頭の良い彼女には、アイヌ民族の風習を教えた。

18歳のときに旭川チカプニ・コタンの杉村コキサングルと結婚したが、1935(昭和10)年、事故で夫を亡くした。第二次大戦中、戦後と幼い子を抱えて苦しい生活を送ってきたが、後年は幼少の頃より培ったアイヌ文化を、アイヌ民族、和人の区別なく伝えてきた。現在彼女の残した口承文芸は100を超え、今日アイヌ語の学習をするのに役立てられている。

キナラブックという名前はアイヌ語でガマの穂を取るという意味。赤ん坊のときに、その手にガマの穂をつかんだことから、器用な子に育つであろうと名づけられた。一般にはキナラブックの名で知られるが、その生い立ちからつけられた名を今日の表記で書くと《キナラブック》となる。その名の通り、ガマを使って作る模様入りのござ、《チタラベ》織りの名手であった。他に、《エムシアッ》(刀の帯)、《ヤイサマ》(即興歌)の名手でもあり、実に多岐に渡る、アイヌ文化の伝承者であった。

1909(明治42)年2月24日、現登別市に生まれる。

1923(大正12)年3月、北門尋常高等小学校高等科を卒業。1929(昭和4)年、室蘭中学校卒業後、幌別の役所に勤める。1930(昭和5)年3月、金田一京助の勧めにより、旧制第一高等学校に入学。1933(昭和8)年4月、東京帝国大学文学部入学、アイヌ語研究の道に進んだ。

1937(昭和12)年、同大学言語学科を卒業後、同大学院博士課程に進み、文学博士号を取得。

1940(昭和15)年、《ヤンケモシリ》(樺太)へ渡り、樺太庁立豊原高等女学

校で教鞭に立つ。1947（昭和 22）年、北海道大学法文学臨時講師、1949（昭和 24）年、専任講師を経て、1958（昭和 33）年 3 月、北海道大学教授となる。

アイヌ民族の視点からアイヌ語を理論的に研究し、『分類アイヌ語辞典』で朝日文化賞を受賞。

アイヌ語地名研究者の山田秀三とも共同しながら、アイヌ語学的に厳密な解釈を徹底させたアイヌ語地名の研究を進め、数々の論文や『地名アイヌ語小辞典』などを刊行し、『ヤウンモシリ』（北海道）の地名研究を深化させた。また、言語学者・服部四郎との共同で『ヤウンモシリ』（北海道）・『ヤンケモシリ』（樺太）各地のアイヌ語諸方言の研究を行い、アイヌ語の方言学の基礎を築いた。

心血を注いだ『分類アイヌ語辞典』の完成を見ずに、1961（昭和 36）年、病没した。金成マツは叔母、知里幸恵は姉にあたる。

知里 幸恵 ちりゆきえ

（1903 年～ 1922 年）

登別の名家、知里高吉と、金成マツの妹ナミ（アイヌ語名、ノカアンテ）の子として 1903（明治 36）年に生まれたが、6 歳で旭川の近文聖公会伝道所にいた叔母の金成マツのもとへ引き取られ、19 年というあまりに短い生涯の大半を旭川で過ごした。

学校での幸恵は非常に優秀で、成績は常にトップであった。また下級生の面倒を良く見るとても優しい人であったという。生まれつき心臓に欠陥があり、体も弱かったが 14 歳から 17 歳までの 3 年間、「旭川区立職業学校」へ 4 キロの道のりを徒歩で通った。旭川の厳しい冬の中、急ぎ足で通った道のりは彼女の体を蝕んでいった。

彼女が 15 歳の夏に、文学者の金田一京助が、近文伝道所に金成マツ、モナシノウクを訪ねてきた。金田一は、彼が最高の《ユカラクル》（叙事詩人）であると絶賛するモナシノウクを訪ねたが、幸恵と出会い、彼女の文学における並々ならぬ才能に感嘆した。また彼女は、アイヌ語と日本語を巧みに操る才能も持っていた。幸恵は金田一に「アイヌのユカラが価値のあるものなのか」と尋ねた。すると金田一は「ユカラとは、アイヌの祖先の戦記物語であり、詩の形でうたい伝える叙事詩という文学であり、ギリシアの『オデッセイ』『イーリアス』と並ぶ、大変貴重なものである。叙事詩というものは民族の歴史であり文学であり、宝典

でもあり、聖典でもある。これを書きとめ残すことは大変重要なことである」と、説いた。そして幸恵は生涯をアイヌ語研究に費やす決意をした。

旭川区立職業学校卒業後、金田一からノートが送られ、幸恵はアイヌ語の表記にはローマ字が適していることを発見し、養母のマツからその綴り方を習い、モナシノウクから伝い聞いた『アイヌ伝説集』を書き上げ、金田一に送り返す。これがアイヌ自身の手による最初のアイヌ語筆録である。さらに、『アイヌ伝説集 2・3』を書き続けた。金田一の熱心な勧めで上京を決意し、1922（大正 11）年 19 歳の幸恵は、金田一宅へ赴いた。不慣れな土地で気を使いながらも、『アイヌ神謡集』を書き上げ、無理がたたって体をこわし、ついに帰らぬ人となった。

「その昔この広い北海道は、私たち祖先の自由の天地でありました。天真爛漫な稚児のように、美しい大自然に抱擁されてのんびりと楽しく暮らしていた彼等は、真に自然の寵児、何という幸福な人たちであったでしょう」で始まる『アイヌ神謡集』の序文の、清らかな魂の表現、美しい言葉は、今もなお人々の心を捉えて放さない。

1990（平成 2）年、かつて彼女が通った尋常小学校（現旭川市立北門中学校）に、彼女を偲んで地元アイヌ有志によって文学碑が建立された。また、毎年 6 月 8 日彼女の生誕の日に「知里幸恵を偲ぶ会」が、同地において地元アイヌ有志と、中学校によって開催されている。さらに 2010（平成 22）年 9 月には「知里幸恵 銀のしずく記念館」が生誕の地である登別にオープンし、彼女の生涯と偉業を伝えている。

床ヌブリ とこぬぶり

（1937 年～ 2014 年）

1937（昭和 12）年、釧路春採（はるとり）に生まれる。釧路市阿寒湖温泉アイヌコタンで活動した木彫家であり、演出家でもある。

幼少の頃、父の友人であった故山本多助エカシと出会い、中学を卒業後弟子入りする。後に本格的に木彫りを習得するため旭川へ行き、木彫り熊などの手ほどきを受けた後、阿寒へ移り住み、アイヌ民族の芸術家である故砂澤ビッキに出会い、強い影響を受ける。

その後、数多くの展覧会での入賞や、道外での個展を開催し、世界的にも知られる存在となった。

1976（昭和51）年の阿寒湖ユーカラ座パリ公演を演出、総合監督として大成功させた。

モダンアート展、全道展入選、新郷土芸術賞受賞など様々な賞を受賞し、アイヌ民族を代表するアーティストである。また、アイヌ民族の文化継承者であり、若手の指導にも尽力し、なくてはならない存在であった。

とかく、アイヌ民族の木彫りはお土産品としてばかり知られているが、アイヌ文化を基調とした木彫りを現代アートまで高めた功績は計り知れないほど大きい。

野村 義一 のむらぎいち

（1914年～2008年）

1914（大正3）年10月20日、現白老町に生まれる。

1930（昭和5）年3月、白老第一尋常高等小学校を卒業後、同校の学校給仕に就く（1934年まで）。

1935（昭和10）年、月寒歩兵第25連隊入隊、翌年除隊。

1936（昭和11）年6月、白老漁業会に就職。1939（昭和14）年に再応召、翌年除隊。白老漁業会に復職。1943（昭和18）年に再応召、《ヤンケモシリ》（樺太）へ。

1948（昭和23）年、真岡から函館に引き揚げる。1949（昭和24）年に白老漁業会専務理事に就任。

1955（昭和30）年、白老町議会議員に初当選し、7期28年間務める。

1960（昭和35）年4月、社団法人北海道ウタリ協会常務理事兼書記長に就任。1964（昭和39）年4月、同協会理事長に就任し、1996（平成8）年5月の退任までの32年間、アイヌ民族の地位向上やアイヌ文化の振興、発展に多大な貢献した。その間、ILO総会や国連などの国際会議に参加し、1992（平成4）年に国連本部で開催された「国際先住民年」の開幕式典では、先住民族の代表として招待を受けて演説を行うなど、アイヌ民族をはじめとして世界の先住民族の地位向上に寄与した。

1978（昭和53）年以來、「アイヌ新法」の制定に尽力され、その活動は1997（平成9）年、「アイヌ文化振興法」として結実した。

さらに、アイヌ無形文化伝承保存会会長、北海道アイヌ古式舞踊連合保存会会長として、アイヌ文化の伝承・保存に尽力するなど、広くアイヌ民族の社会経済、文化の発展に大きく貢献した。

2008（平成 20）年 12 月逝去（94 歳）

《主な受賞歴》

1974（昭和 49）年 紺綬褒章受章

1975（昭和 50）年 自治功労賞受賞

1980（昭和 55）年 北海道町村議会議長会表彰

1985（昭和 60）年 地域文化功労賞受賞（文部大臣賞）

1994（平成 6）年 北海道開発功労賞受賞（北海道知事賞）

1997（平成 9）年 勲五等双光旭日章受章

1997（平成 9）年 北海道新聞社文化賞受賞

バチェラー 八重子 ばちえらーやえこ

（1884 年～ 1962 年）

1884（明治 17）年、現伊達市（有珠）に生まれる。

父の向井富蔵は、洗礼を受けたキリスト教徒で、八重子は 1891（明治 24）年、英国人宣教師ジョン・バチェラーの手により洗礼を受ける。

1899（明治 32）年、有珠の実母の元を去り、バチェラーが札幌に開いたホームズスクールに入学する。

1906（明治 39）年、バチェラー夫妻と養子縁組を結び、養女に迎えられる。
1909（明治 42）年 1 月、養父母と共に渡英し、カンタベリー大主教の信徒按手を受ける。

1912（明治 45）年、バチェラーと共に《ヤンケモシリ》（樺太）伝道の後、アイヌ保護学園の寮母を務める。1924（大正 13）年頃から、幌別、平取などの教会に勤務した。1931（昭和 6）年、歌集『若きウタリに』出版。（発行所東京・東京堂）

キリストの教えとともに生きてきた八重子は、アイヌ民族の《ユカラ》や口承文芸などにも、より深く触発された。八重子の歌は、和人からの差別への抵抗をにじませ、アイヌ民族の疲弊した心を力強く支えていた。

1934（昭和9）年、美幌町に生まれる。まもなく旭川に移り住み、木彫り熊の名手として知られた父・竹夫のもと、幼い頃から熊を彫り始める。1964（昭和39）年、独立して阿寒湖畔に民芸店「熊の家」を構える。

主な展覧会歴に、「AINU: Spirit of a Northern People」（1999年、スミソニア国立自然史博物館）、「AINU ART— 風のかたりべ」（2013年、北海道立近代美術館）、「現れよ森羅の生命—木彫家藤戸竹喜展」（2017年（公財）アイヌ文化振興・研究推進機構）などがある。

2014（平成26）年、釧路市文化賞受賞。2015（平成27）年、北海道文化賞受賞。2016（平成28）年には文化庁から地域文化功労者として表彰される。

野生動物の、時に荒々しく、時に繊細な表情を大胆に表現する独自の木彫表現は、他の追隨を許さない。

1904年（明治37）年7月5日、釧路市春採（はるとり）コタンに生まれる。弱冠18歳で《ヤンケモシリ》（樺太）に渡り、シベリア沿海州の黒龍江流域の地名と、先住民の言語調査を行い、アイヌ民族と周辺民族との関わりを研究。

1935年（昭和10）年、屈斜路湖畔で木彫り民芸品店自営、先駆的役割を果たした。

1957年（昭和32）年『アイヌ・モシリ』を発刊以来、著書多数。

「アイヌ民族のことはアイヌの手で」と、精力的に民族解放運動に参加。アイヌ民族が社会的に無視され続けていた当時、「どっこいアイヌは生きている」と、民族自立と差別撤廃を叫び続けた。

1976（昭和51）年、阿寒湖ユーカラ座から《ユカラクル》（語り部）役として招かれ、パリのユネスコ本部の「ジャパンフェスティバル」で公演し、国際的に大きな反響を呼んでいる。

1978（昭和53）年、平凡社発行の『怪鳥フリー』は代表作で、全国図書館協議会、中央児童図書審議会から指定を受けた。

1985（昭和60）年、アイヌ文化振興の功績が認められ、北海道文化賞が授与

された。

多助翁は、《ヤウンモシリ》（北海道）の「開拓」を侵略行為とみなし、「和人は赤鬼青鬼」と言い放ち、いかにアイヌ民族が「開拓」の美名のもとに辛酸を舐めたか、いかに追い詰められたかを、歯に衣着せぬ言動で訴え続けた“人権の人”であった。また、その精力的な活動により、多くのアイヌ民族同胞の精神的支柱となっていた。

1993（平成5）年2月逝去（88歳）